

第1回 射水市小杉駅周辺地区まちづくり基本構想策定協議会 会議録

○日時：令和2年8月7日（金）10時～12時

○場所：救急薬品市民交流プラザ 3階 会議室1

○出席者：

	氏名	組織・団体名	区分
会長	大西 宏治	富山大学 人文学部 教授	学識経験者
副会長	炭谷 靖子	富山福祉短期大学 学長	
	榊原 一紀	富山県立大学 工学部 准教授	
委員	籠浦 克幸	あいの風とやま鉄道株式会社 総務企画部長	公共交通事業者
	上野 裕之	有限会社小杉タクシー 代表取締役	
	瀬木 昭博	小杉まちづくり協議会	関係団体の代表者
	永森 豊	小杉まちづくり協議会	
	(欠席)高田 忠直	小杉まちづくり協議会	
	鳥内 雄輔	射水市商工会	
	(欠席)三浦 美樹	射水青年会議所	
	伊勢 達哉	宅地建物取引業協会高岡支部 副支部長	
	坂井 禎	高岡土木センター 所長	関係行政機関の職員
	(代理)高嶋 康	高岡土木センター 次長	
事務局	島木 康太	企画管理部長	市の職員
	一松 教進	財務管理部長	
	板山 浩一	市民生活部長	
	小見 光子	福祉保健部長	
	谷口 正浩	産業経済部長	
	島崎 真治	都市整備部長	
	前川 信彦	上下水道部長	
	原 宗之	教育委員会事務局長	
	木田 徹	消防長	
	小塚 悟	企画管理部政策統括監兼企画管理部次長	
	盛光 寛人	政策推進課長	
担当課	佐藤 昌宏	政策推進課 主幹	
	篠原 智成	政策推進課 主査	
	楳葉 友一	政策推進課 主事	

○配布資料：

資料1 射水市小杉駅周辺地区まちづくり基本構想策定協議会設置要綱、協議会名簿

資料2 射水市小杉駅周辺地区まちづくり基本構想検討業務委託報告書（概要版）

資料3 小杉駅周辺地区まちづくり基本構想について

資料4 市内高等教育機関へのアンケート調査の実施について
アンケート調査票（学生用、教員用）

参考資料 射水市小杉駅周辺地区まちづくり基本構想検討業務委託報告書（全体版）

1 会議次第

- 1 開会
- 2 議題
 - (1) 令和元年度射水市小杉駅周辺地区まちづくり基本構想検討業務の報告
 - (2) 小杉駅周辺地区まちづくり基本構想について
 - (3) 市内高等教育機関へのアンケート調査の実施について
 - (4) その他
- 3 閉会

2 会議録

事務局：小杉駅周辺地区のまちづくりは、旧小杉町において平成2年に小杉駅前地区市街地再開発事業基本計画が策定されている。平成17年に市町村合併により射水市が誕生し、最近では駅前にスーパーホテルの進出などがあり、小杉駅を取り巻く地域の環境が大きく変化してきている。このような状況を踏まえながら皆さんにお示しできる新たな今後のまちづくりの指針、計画が必要であることから本市の陸の玄関口として重要な役割を担う小杉駅を中心としたまちづくりの基本構想を策定することとした。今回策定する基本構想は夢ある計画を長期的な視点で描くとともに、市街地の衰退や空き家の増加、少子高齢化など社会の課題を解決すべく短期的視点でも取り組む必要があると考えている。本日は、これまでに調査した内容をもとに現状と課題・方向性を共有し、皆様方からご意見をいただきたいと思っている。

会長：射水市は色々な歴史があるため、地域の歴史についてもっと上手くアピールして行ければいいと思っている。射水市が平成の大合併で誕生したことにより、いくつかの核が併存している。その中の一つが小杉駅周辺地区であり、あいの風とやま鉄道による陸の玄関口であることから、この場所が人々の目に触れた時に非常に魅力的に映るまちであることが重要だと思う。外から見て暮らしてみたいと思うまちを今ある資源から作り出してくとか、現在暮らしている人たちの満足度をどうやって高めていくのか、その意味でこの協議会では新たな資源よりも今ある資源を活用していくことを構想して位置付ければと考える。皆様から様々なご意見をいただきながら、進めていきたいと思っておりますのでよろしくお願ひしたい。

(1) 令和元年度射水市小杉駅周辺地区まちづくり基本構想検討業務の報告

- 事務局より、「資料2 令和元年度射水市小杉駅周辺地区まちづくり基本構想検討業務の報告」について説明

会 長：説明した内容についてご質問、ご意見はありますか。

委 員：小杉まちづくり協議会について少し説明させていただく。地域は、戸破地区・三ヶ地区を合わせたエリアで、現在の人口が約 14,000 人、世帯数が約 5,700 世帯で、射水市の約 15%を占めている。この中でまちの活性化について住民みんなで考えようということから小杉まちづくり協議会を立ち上げた。活動資金を確保するため、地域の町内会に参加している約 4,000 世帯から、一世帯あたり 300 円を集めて活動資金としている。したがってこの地域の住民全員がまちづくり協議会の会員であるということになる。協議会では目に見える活動が大事であるとして大きなイベントを実施している。春の鰻絵と下条川千本桜まつり、夏の下条川みこし祭り、秋の旧北陸道アート in 小杉など、地域で取り組んでいる。戸破・三ヶ合わせて 51 の町内会があり、各町内の会長が代議員として参加し、活動している。資料（報告書概要版）22 ページの地域の活性化に向けた施策の方向性に挙げられている項目の全てに関するいろいろな取組を実施してきたが、やはり限界があることを感じている。今回まちづくり基本構想策定協議会が設置されたことは地域にとってもありがたいことだと思っている。

会 長：資料 1 は小杉駅周辺地区のデータを用いて様々な状況を把握するとともに、これまで策定されてきたプランとの関係性について整理したものになる。小杉駅は射水市の玄関口の一つであるという考え方に立って小杉駅周辺地区の課題について位置づけしているが、位置づけに至る前に後背地の状況等についても把握してほしい。例えば背後にある様々なリソース、太閤山団地など、いくつかデータで検討されていないことも合わせて関係性についてもっと言及することにより、新たな気づきがあるかもしれない。エリアの細かいデータだけではなく、もう少し広くこの地域とのつながりを眺めていくことで理解が深まると感じた。

(2)小杉駅周辺地区まちづくり基本構想について

(3)市内高等教育機関へのアンケート調査の実施について

●事務局より「資料 3 小杉駅周辺地区まちづくり基本構想について」

「資料 4 市内高等教育機関へのアンケート調査の実施について」の説明

副会長：アンケート調査対象に県立大学の看護学部が入っている理由は何でしょうか。また資料 4 に学生数 480 人と記載があるが、現在 1・2 学年しか在籍者がいないと思うがいかがでしょうか。

事務局：事務局で確認し、適宜修正する。

副会長：看護学部の本拠地は富山市にあり、ほとんどの学生がシャトルバスで通学しているので小杉駅を知らないのではないか。

副会長：看護学部においても低学年の生徒は射水キャンパスで授業を受講するため、なにかしらの効果はあると考える。基本はシャトルバスの利用が主となっている。

副会長：対象を小杉駅周辺のまちを知っている学生としている中で、ほとんど知らない学生がサンプルに入ることにより正しい結果が導かれるのか。

会 長：受講形態や頻度等について確認し、クロス集計をする時に実態に合わせて看護学部を入れたり除外したりの工夫ができると思うので、分析上の問題を危惧する必要はない。

委 員：報告書概要版のとおり、小杉駅の乗降客数はこれまで増加傾向で推移してきた。しかし、令和元年度の数値を見るとその前年度からの推移は若干減少となっている。さらに新型コロナウイルス感染症の影響で今年の4月、5月については半減している。定期利用は戻りつつあるが、定期以外の客が半分以上に減っている。この影響がこのまま続いてステイホームとかテレワークが進み、自動車にシフトしたお客様が戻らないことを危惧している。駅は交通の結節点とはいえ、将来も賑わいの中心になり得るかどうか長い目で見ていく必要がある。今回策定する構想において、駅の機能の向上が必要だとしても、駅の橋上化を前提とすることには慎重にならざるを得ず、市と鉄道側との協議が必要である。皆様との議論を踏まえながら今後当社としてどのような対応をとっていくべきか検討していきたい。その際には市とも十分連携して進めていく必要があると考える。

会 長：今後の交通利用を考えた際、駅を拠点として設定して良いのかどうかという面白い指摘をいただいた。ただ結果的に、検討しても同じく結節点の一つであるという結果になると思うが、今後議論していきたい。

委 員：昭和40年代の三ヶ、戸破は非常に人の流れがあり賑わっていたが、平成になり人の流れが止まった。商業的に富山県を見ても南へ南へと流れる傾向が強い。婦中町、砺波市、高岡駅周辺でも南側の地区が商業的にも伸びている。小杉駅周辺でもアルプラザが進出し、南側の開発が進んでいる。それによって三ヶ・戸破地区の人の流れが止まっているとも考える。こうした状況下で小杉駅周辺の再開発をする場合、何を核にするのか考えていかなければならない。南北通路を中心に駅周辺を整備するのか、スーパーホテルを中心に駅を再開発するのか。再開発によりまちが発展することは分かるが、新湊地区にクロスベイ新湊ができ、集客が新湊地区に集まっていくのではないかと考えている。小杉地区は学園都市の性格を持っているが、学生の方々が魅力と感じる拠点が無いことが問題だと思う。学生の方に賑わってもらえるような拠点づくりが必要である。また、交通事業者の要望として、駅には、屋根や椅子を設置する等、利用者の利便性を考えてバスターミナル、タクシープールを整備する必要がある。現在駅に噴水があるが、夏場は蚊が発生し、強風時には水しぶきが飛ぶことから不要であることを要望として挙げさせていただく。

事務局：小杉駅については三ヶ・戸破地区の拠点であるとともに、市全体の玄関口であると考えられている。その玄関口から、新湊地区、太閤山地区への人の流れを生み出していくことが必要と考えている。今回策定する基本構想は、どこまで具体的な内容を位置づけていくのか協議会の中で議論いただき、例えば駅の橋上化では、当然あいの風とやま鉄道の協力が必要であり、市としても多額の経費が必要となる。その財源の手当等も協議しながら基本構想を仕上げていければと考えている。

委 員：宅建業という立場から空き家と開発について考えると、北地区と南地区では違いがある。空き家は圧倒的に北側の旧町に多く、空き家対策については宅建業界での相談受

付や市の空き家バンクがある。実際に空き家になると所有権が問題となり、流通させるにも限界があり、空き家化の流れは今後ますます加速していくと考える。南地区は、新しく宅地開発され、集合住宅新築のペースも毎年早まっている。民間では、宅地開発すれば売れるだろう、人が入るだろうということで進めてきた経緯がある。この協議会では基本構想の実現に向けて、何を具体的に実現するのかということも最終的に議論すると思うが、小杉駅の北側の再開発であったり、南北の通路を整備したり、新しく民間の事業者を募集しながらマンションとか展望施設とかを併用していくというのにも必要と考える。実際には、予算や地権者の問題等、多くの問題がでてくる。構想をシミュレーションして、その結果できないということも考えられる。空き家の戸数を把握されていたが、新湊地区では再開発した実績もあるので、これらことも踏まえ協議していきたい。

会長：市街地には古くからの住民がいるので、そこで居住者がいなくなると空き家になっていくというプロセスはどこでも同じである。この地区では、駅の北側が古くからの市街地で、その現象が顕著に見られる。その点を踏まえた上で、実際に具体的な開発を行う際は、この地区をどう活用していくのか検討が必要である。しかし、この協議会は具体的なところより、どういう方向性でまちづくりをしていくのかという観点が必要である。この地区がもつ性格をどう方向づけていくべきなのか、射水市全体の中での位置付けを考えた上でどういう場所であるべきなのか、ということを確認しなければならない。事務局はいかがでしょうか。

事務局：まちづくりの構想であるので、どこまで具体的なところまで踏み込めるか、しっかりとした基礎資料を持ちながら協議させていただきたい。

委員：小杉駅を中心とした都市規模で人を集めたいといっても、どの範囲までの人を集めるのか、富山県内だけか、全国的に人を集めるのか。旧 JR の時代と現在と比べて小杉駅の利用者数はどの程度変化しているのか、旧小杉駅でどれだけ特急券が売っていたのか、県外からの来訪者がどれだけいたのか、もてなし機能の整備にも関わることなので確認させていただきたい。

会長：JR の時代とあいの風とやま鉄道の時代の利用客数の変化、またわかれば特急券の利用客等を教えていただきたい。

委員：特急利用についてのデータはない。乗車人数については、報告書概要版の 9 ページに掲載の乗車人数の推移グラフに見られるとおり 2014 年に JR からあいの風とやま鉄道に移行して一旦下がっているがそれ以降は増えている。特急が来なくなったということから金沢から富山県内に入って来る方は当社線を利用するだけでなく、新幹線を利用することになるので、観光客の利用数は JR の時代よりも減っていると思う。一方でダイヤ改正とか利便性の向上に努めてきたので、一般の利用客、県内客、定期客の利用は増えている。

会長：駅にどういう方々に来ていただいて、その人たちがこの出入口をどのように利用いただくのが重要である。この協議会でその点も合わせて検討していく必要があると思うが、現時点で事務局から、今回の資料から考えられることがあれば発言願いたい。

事務局：小杉駅は交通の結節点、生活の一部、通勤通学等々、交通のハブとしての役割が大きいと考える。新湊地区でもまちづくり協議会を立ち上げ、クロスベイ新湊を中心に賑わいの創出を図っている。秋から、小杉駅からクロスベイ新湊への往復バスを走らせることにしており、市にとって陸の玄関口として大きな役割を持つ小杉駅から新湊地区への人の流れを作るというのも一つの施策だと考えている。具体的には観光客利用もあるが、どちらかと言うと生活及び観光拠点としてのハブの役割が大きいと考えている。

会 長：基本的には、日常生活で小杉駅を利用する利用する方の視点でまちづくりを考えていくことを中心に、オプションとして外から来た人にも魅力を感じていただけるようなことになるかと思う。

委 員：全国で公共交通の見直しが進められており、公共交通の改善・強化が進められている。北陸地方でも福井は公共交通を活用してまちの活性化を図っており、金沢でも市内に路面電車を走らせる構想や、富山市は公共交通を軸としたコンパクトシティを進めている。小杉駅においても居住環境の利便だという声は多く、人口は増えてきているので、上手く活用すべきだと思う。空き家が増えて商店街が衰退していることについては、先日、商店街の方々との意見交換会の場があった。そこで、子育てが一段落した女性とか若い方を中心に、チャンスがあれば出店したいという人が多くおり、それらの人たちに空き家を活用して人々を呼び込める場をつくってはどうかという話があった。小杉駅の北部は古い街並みもあり、それを活用していけば商店街の活性化につながっていくのではないかと考え、現在、小杉まちづくり協議会としてもいろいろと仕掛けをしており、そういうことが実っていくと考える。基本構想では夢を語ることが大事だと考える。観光客については、新湊地区の海王丸パーク等で年間 108 万人ほどの来訪者があり、小杉地区は年間 1 万人程度なのであまり期待できないと考える。それよりも県内の方々の小杉にちょっと行ってみようかなと思えるまちになれば面白いのかなと思う。

委 員：私自身、旧北陸道沿いで店舗を営んでおり、旧北陸道の商店街を何とかしなければならぬと考えている。私はものづくりが好きであるが、市内には伝統工芸が存在していないため、県指定の伝統工芸の常設展示場の体験スペースをつくった。また、事務局も射水市に持ってきたいと考えている。旧小杉町の時代から鍔絵のまちとして取り組んでおり、ものづくりの土壌があるので、そういうものを活用して盛り上げていきたい。木を使った伝統工芸の技術を活かして、子どもたちに木に触れて楽しんでもらう、木育キャラバンを企画し実施している。駅北側はまちが疲弊している状態なので、何か一つシンボリックなものがあれば盛り上げることが出来ると考え、この取組がシンボルになれば良いと思っている。若い人がチャレンジしたいと思っても、何も無いところでは難しいと思うので、人を呼び込んで楽しめる集客するものがあれば、創業する方も増えると考えている。

会 長：これからのまちづくりは単に箱ものができるというよりは、学生も含めた住民の皆さんが、自ら参画するかたちでまちをつくっていくところに喜びを感じるような

ところがないと持続しない。それには、ある程度の戦略が必要であり、住民から参画して作っていくところで、そこに対してどういう人の流れを作り出せるのかということ協議していければと思う。例えばプラモデルは半製品の部品を組み立て満足感があつたが、それよりは材料を切ってパーツを自分で作って模型を組み立てる方がより満足感が高い。これが、今のまちづくりではないかと考える。つまり、既にパーツがあつて設計図もあつて組み立てたらできるというものではなく、パーツを作るところから考えていくという状態なのだと思う。ただ今の多くの人達はレディメイドのまちづくりを求めており、この構想策定の過程で、住民の皆さんの意識の変革から醸成していくことができれば、状況が変わっていく印象がある。

副会長：国際観光学科の人たちとの意見交換で、観光客に来てもらうのではなく、観光で来た人がそこを宿泊の拠点として、長期間、安価に宿泊できる空間をつくるのが大切と聞いた。小杉は県の中央部で県内を行き来しやすい位置関係から、そのようなニーズを取り込める宿泊施設をつくれれば良いという話を聞いた。空き家をゲストハウスにリノベーションして運営し、リピーターを作り地域との交流が深まれば、転入者も増えるのではないかと。そうすることが、住みやすく、選択されるまちづくりにつながるということであった。

会長：長期滞在の観光客の多くは、アジアや欧米の方ですが、北陸地域は欧米からの観光客が少なく、太平洋側と比べると桁が違ふので、いろいろと課題はあると思う。ただ、現状よりも将来を見た時に可能性が広がることもある。

委員：小杉地区は、学生が溢れる文教地区であり、多くの学生は自家用車で通学している。しかしながら、長期的な視点で考えると、今後超高齢社会において運転できなくなる人が増え、自家用車保有率の高い状態は長くは続かないと予想されている。このことから、シェアリングエコノミーと言われるカーシェア、ライドシェア、シェアサイクルなどの新しい交通手段が出てきている。鉄道もある意味シェアリングエコノミーの一つであり、鉄道とかパーソナルモビリティなどが、10年後には情報のかたちで統合されていくと予想されている。善し悪しは別にして、情報技術が社会の有り様を劇的に変えることになる。10年後には、今我々が見ている世界とはまったく違う世界となることが想像されることから、将来に対して何か準備ができるかを考えていかなければならない。最低限情報インフラみたいなものを構築し、こういう情報環境を用意しておくことによって、その先の新たな変化に対応できるのではないかと考える。

会長：ICTの活用も必要であり、特にシェアリングエコノミーの中でICTはキーになるので情報インフラの整備は必要である。速達性が高いwi-fiや5G等を整備も重要であるが、それ以上に、射水市で取り組んでいるLPWAの様な、広い範囲をカバーする無線通信ネットワークを活用しながら、新たなものを付け加えていくことも重要である。

(4)その他

事務局：委員の皆様から様々な観点で意見をいただきました。特に地域の方々からはそれぞれの立場でこの地区の将来について、強い思いをお持ちのことと改めて感じたところで

ある。次回は、小杉駅周辺に将来的にどのような都市機能を持たせていくのかという具体的な議論に入ることになる。そこでまず、地域住民の方々の意見を反映していくことが重要との観点から、8月28日、29日の両日に戸破地区、三ヶ地区においてワークショップを開催させていただく。そこでの意見等も踏まえ、第2回の協議会では基本構想の目標や将来像の案のたたき台をお示しできればと考えている。次回の会議日程については10月下旬を予定している。

—了—